

(11月号) 保育雑誌より

保 育

先ずこの誌も幼稚園創設八十周年の事が取上げられ、山下俊郎氏により、八十年の歩みが紹介され、今後の幼稚園教育の発展性が望まれており、幼稚園唱家の誕生として東先生御夫妻の訪問などは興味深い。

前号より続く小川正通氏の教員養成の問題、大西憲明氏の幼児を愛すればこそ、は幼児教育の根本問題としての大きい問題でその内容もみのがせない。

子どもの性格について(伏見猛弥氏)、幼稚園における視覚教育(上野辰美氏)、幼児画問答の画藝の功罪(宮武辰夫氏)、ジャンブルジムの使用について(大阪市立精華幼稚園)などは、保育にあたるもの、先生も母親も参考になり、又直接にも役立つ数箇所もあり、実際の場の事であるから又

読者としても読み易いものである。

その他、表誌に名うっている如く母親にも参考になる箇所が、まだ二、三あり、絵本「ひかりのくに」の解説や、簡単な製作、舞踊、は子どもたちと共にたのしめる材料になろう。

健康方面も、「食物と栄養」と題して茶珍俊夫氏のお話がある。一つ忘れていた。子どもの十字路と題し、白井勇氏の「泣いてかえる子」は生活指導面というおうか、これも理論でいかつめらしいのでなく、随筆的に書かれてあるのも読み易いところである。実際例からくる参考ものとなろう。

保 育 ノ ー ト

(遠足特集号)

世の中が落着きをとりもどし、さまざまな時勢の進展に伴って幼児教育も一応そのみちをとおり、新教育、新しい幼稚園のあり方、考え方、計画、指導法などが研究されてきた。

その間、遠足も時の波により、戦後ごく近くの草原に貧しいお弁当を持って出掛けたときや、現在のように、立派なバスをつらねて賑々しく遠くの方へ出掛けるなどの変化はあったにしても、一つの行事として毎春秋行われていたことに変りはない。

そこで単なる行事としてすませてしまっただけでなく、遠足について、理論の面からそのあり方・細かい計画のたて方・心づかい・遠足をとおして社会の観察、保育内容との結びつき・生活指導・つきそいの問題などが、いろいろの地域や角度からとり上げられている。

特に先生の側から「同伴者への希望」ということについて、集団訓練の立場からいえば望ましくないが、園の環境・特殊事情によって、親が常に子どもと接触を持たない場合には、子どもと共にすごしたい、という健康的な要求も出るわけなので、その際は親の解放感から、教育という道をはずれた計画にひきづられないように、「親の為

の指導計画をなされなければ無意義である」とあるのは、兎角父兄の要求によって幼児中心の遠足か、大人のレクリエーションに子どもを伴っていくのか分らないようなあり方を耳にすることの多いとき、一考を要することだと思ふ。ここに아가っている理論やつみ重ねられた経験によって書かれたものは、遠足などで何かと支障の多い時節柄、単にすませればよいという無性からぬけ出し、更にすすんで本当のあり方が考えられ、遠足を更に楽しく有意義なものにするのに役立つことと思ふ。

其他、十一月カリキュラムとして、遠足にも関係のある「みのりの秋」を中心に、保育六項目について解説されている。

保育の手帖

この本は二・三の論文と、保育内容別の保育講座、お話、相談室、カリキュラムの

問題が載っている。保育者の側からは、具体的な内容を理論的にのべられている保育講座が、取材の参考にもなり、直接役に立つと思ふ。健康のところで、冬の衣服についてかかっている。これは、科学的根拠がはっきりすると、自信をもって家庭との連絡に注意も出来、一歩進んだ健康管理も可能で、さびしい寒さに向っている現在として、参考になる問題であると思ふ。自然のところでわかるように、この保育講座の内容も、幼稚園教育要領の線によって編集されているように伺えるから、いわば、カリキュラムの副読本といった感じであろうか。論文も講座も、題材が勿論具体的であり、狭義の中から選んであるためか、読み易いのが特徴である。

鈴木鎮一氏の「どの子も育つ育て方一つ」筆者はヴァイオリンの早教育者で有名で、実績を挙げられている。保育者は直接幼稚園でヴァイオリンを教えるわけではなく、子どものみかたについて教えられ、

考えさせられる。集中力の長さが、能力に比例する。これは、幼児期には恐らく少ないであろう。がしかし、毎日少しずつ上手に工夫して指導していくのだと思う。また、環境に順応する力が強いので、優れたりっぱな音楽を、同じものの繰り返しでなくいつも聞かせると、それを自分のセンスとして育っていく。とかかかっている。これらは、単に音楽のみでなく、他の内容にも共通であって、幼児教育の根本原理と併行して考えられる問題であろう。ヴァイオリンだけでなく、私共は、いろいろ思い当るのではないかと思ふ。

幼児と保育

特集の「新しい幼児画の指導」がおもしろい。中でも「絵を通して社会性を育てる」と題した座談会で、創造美育協会・造形教育センター・新しい絵の会の、夫々の立場から、いろいろな問題について話し合っ

いるのは興味がある。先ず、それらがどのように歴史の流れのうちに生れたか。更に、精神分析的な面の強い創美と、それに

対して、もっと美術プロバラーの道を行こうとする造形教育と、個人的でなくもつと社会とのつながりをみて行こうとする新しい絵の会と、夫々の立場が明らかにされている。具体的な指導についても、造形教育では、普通の図画でなくもつと材料を豊富にして工作的なものをつくり出し、新しい絵の会では話し合いをして表現内容を深めていき、創美では、子供が描いている時に干渉がましい言葉をいわないことの重要性を強調するなど、夫々の特色を出している。評価についても主眼のおき方が異なってくる。このように幼児画理論はいろいろ展開されているが、これらの理論と現場との関係はどのようであろうか。一般に、「おもしろい絵」「子供らしい絵」などの言葉が、漠然と直観的に、無条件に適用しすぎていると思うのは私だけであろうか。とにかく、

く、絵画指導の新しい動向を知ることが現場の教師のよい刺激になると思う。

幼児の指導

十一月号は色彩の心理と保育の特集号。

「色彩と保育」西川好夫氏、「色彩と幼児の生活」については、美しい環境で保育をと、保育者の深川あい子氏、園を美しくと画家装飾家の赤壁美沙子氏、色彩あそびの實際を明間進子氏が、それぞれの立場より書いておられる。中でも各保育室の色を落つた結果、ピンク、うすい緑、クリームに分落つかないという實際の例など興味深く、環境の美的整理が如何に必要かを考えさせられる。

保育場での色彩、室内装飾の實際、遊具の色彩などについても具体的に記されている。

新しい園の工夫で本田鉄麿氏は、園舎の

建築上の欠点を、ある程度色彩によってカバー出来る、ここに環境整備の工夫があると園舎の色彩化のことをのべている。

其の他、阪本越郎氏が今月より連載でテーパーレコーダーの使い方としまい方について、詳細にわかりやすく説明されているのも、視覚教材を使つての保育が重要視されて来た今日、参考になる面が多いと思う。

尚、保育内容の社会や自然観察、造型指導健康生活指導、レコードを利用してのリズムあそびなどについての記事もあり、實際の保育を生かし豊かにするのに役立つであらう。

保育の友

『保育の友』は、全国保育大会の決議においての要望により生まれたものであり、全国社会福祉協議会の活動として編集されている誌である。

十一月号は特集として「安全保育」とい

うテーマがもたれてあり、宮下俊彦、深谷敦子、前田登美子、秋田美子、岸野俊太、まきの修二氏等が執筆しておられるが、幼児教育の任に当る一人として、安全保育はかたときもゆるがせにはできない重要な面であるだけに考えさせられるものも多かった。次にその内容をごく簡単にはあるが咀嚼してふれてみよう。

おさな子をあづかる身として園で事故をおこさずにと願う気持は一しおであるが、まだ幼児たちには自らの行動で安全を守りうる能力は十分できてはいない。従って幼児の傍にいて気をつけて見守るといふこと、園の環境をできるだけ安全なものにしておくという仕事がまず第一に必要なようになってくる。しかし交通などの危険も予測される都心の保育施設は勿論、平和郷とみられる農村においても凡ゆる危険からは全く除外されつくした園というのが果してありうるであろうか。こう考えてくると、危険に近よらないことは安全保育の第一歩ではあ

るが、次にもっと積極的なあり方がほしくなってくる。即ち、幼児自らが安全を守るように教育し、幼児により安全な行動を身につけさせるよう教育することが大切となってくる。それは遊具・道具の正しい扱ひ方や、運動能力の発達を助成させるような指導、災害予防のための対策として避難訓練や交通訓練をするなどがあげられてくる。こうして不時の災害に対処するための機敏性を養う訓練を日頃から行なっておくことと共に、非常の際の保育者の態度が、いかにその場にとって肝要なものとなるかはいうまでもないであろう。

更にまた、万一、事故がおきた際の責任の所在や、災害対策立法ならびに共済保険機構の実施を望む章なども貴重な論説として参照される。「安全保育」に万全を期したという気持を、この特集を読んであらためて強く感じるのであった。「以上」

幼児の教育 第五十六巻 第二号

◎ 定価 五十円

昭和三十二年 一月二十五日印刷
昭和三十二年 二月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番
本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いします。